

年間第16主日 7月18日 分かち合い

今日は、このミサの中で、一人の男の子の洗礼があります。

幼児の洗礼によく表れるように、洗礼は、決して、本人の努力や準備の結果ではありません。何よりも、それは神様の無償の恵みです。そして、人となられた神の子、イエスの十字架の奉献がもたらした恵みです。洗礼によってこの大きな恵みに与る幼児が、生涯を通して応えてゆくことができるよう、また、この教会にとっても大きな恵みの時に、わたしたち皆がいただいている洗礼の恵みを新たに心に刻み、困難な状況の中にあっても、信仰を一層大切に生きてゆくことができるよう祈りましょう。

今日のミサの朗読では、牧者という考えが強く出ています。「わたしはよい牧者である」と主イエスは言われましたが、マルコ福音書の中で、弟子たちにとっての牧者であるイエスは、派遣から戻って来た弟子たちに、「人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われます。それでも、人々はイエスが舟に乗って行かれるところに、先回りをして押し寄せてきた、とあります。司祭もときどき、休もうとした矢先に、人が訪ねてくるという経験をします。そして、そうした群衆を見て、イエスは「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」と結んでいます。イエスは、まさに、よい牧者を文字通り生きておられたのです。

第一朗読のエレミヤの預言には、「羊の群れを滅ぼし散らす」悪い牧者の話がありました。イスラエルの王たちが、自分たちの生活にばかり目を向け、人々の生活や苦しみに目を留めなかったことを暗示しています。預言者の教えを汲み、イスラエルの歴史を綴った列王記の記者は、そうした王たちの悪徳ゆえに、国が滅ぼされ、捕囚の憂き目を味わうことになった、と結論付けています。そして、預言者はそうした悪い牧者にかかわって、神ご自身が牧者としてイエスラエルを牧し、散らされた国々から集め、さらには、ダビデの子孫からふさわしい牧者が生まれることを約束されると記します。

教会にも、よい牧者が必要です。教会を管理し、皆を支配する管理者ではなく、人々に寄り添い、支える牧者を必要としています。様々な問題を抱える信徒の世話をするにふさわしい牧者が与えられるよう祈りましょう。同時にわたしたちも、皆、何らかの形で牧者の使命に与っています。家庭において、子どもたちを優しい心をもって養う父であり母であるように、また、健康に恵まれない家族、年老いた親、人生の様々な重荷を負う身近な方々に寄り添う牧者として生きることができるよう、そして、自分に与えられた職場や組織での立場において、権威や力を振るうのではなく、むしろ皆に仕える僕として、主イエスの生き方に倣って生き、委ねられた人々の間に一致をもたらすものとなることが出来るよう祈りましょう。(S.T.)